

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

一の目で川飛び越えて絵双六

旧年や遮光ガラスの薄みどり

手毬唄猫にも聞かせやりにけり

三が日過ぎて四日の日の光

人日の昭和遠しと思ふのみ

松過の大根抜きたる畑かな

この世からあの世へ続く絵双六

手が逸れて、れてで止まりし手毬唄

手が逸れて手毬は母の厨へと

手毬唄つまづきつつも三つまで

手毬唄声美しき姉いもと

手毬唄声美しき二人かな

母の声忘れて久し手毬唄

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

かの人もわれの賀状を読むころか

旧年や遮光ガラスの薄みどり

手が逸れて、れてで止まりし手毬唄

手が逸れて手毬は母の厨へと

手毬唄つまづきつつも三つまで

独逸語はカルテなりける歌留多かな

取れぬ子の涙ながらの歌留多かな

極楽へ上る地獄の絵双六

三が日過ぎて四日の日の光

人日の昭和遠しと思ふのみ

松過の大根抜きたる畑かな

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

かの人もわれの賀状を読むころか

旧年や遮光ガラスの薄みどり

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

独逸語にカルテありける歌留多かな

取れぬ子の涙ながらに取る歌留多

極楽へ上る地獄の絵双六

三が日過ぎて四日の日の光

人日の昭和遠しと思ふのみ

松過の大根抜きたる畑かな

雷を片手に持つて播る山葵

松過の大根抜きたる畑かな

万力に万の力や雲の峰

重ね着て齡めでたく重ねをり

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

靴べらで踵を入れて初詣

かの人もわれの賀状を読むころか

旧年や遮光ガラスの薄みどり

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

独逸ならカルテと言へる歌留多なり

取れぬ子の涙目取る歌留多かな

極楽へ上る地獄の絵双六

三日はや過ぎて四日の日の光

人日の昭和遠しと思ふのみ

通行の妨げとなる石鹼玉

弟の悔し涙に取る歌留多

山葵播る手に雷といふ字かな

極楽へ上る地獄の絵双六

万力に万の力や雲の峰

三日はや過ぎて四日の日の光

噴水に夕立の水も循環す

人日の昭和遠しと思ふのみ

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

松過の大根抜きたる畑かな

賽の目の豆腐も入れて納豆汁

重ね着て齡めでたく重ねをり

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

靴べらで踵を入れて初詣

かの人もわれの賀状を読むころか

旧年や遮光ガラスの薄みどり

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

通行の妨げとなる石鹼玉

旧年や遮光ガラスの薄みどり

山葵播る手に雷といふ字かな

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

万力に万の力や雲の峰

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

噴水に夕立の水も循環す

弟の悔し涙に取る歌留多

肩組んでこちらへ迫る土用波

極楽へ上る地獄の絵双六

昼寝覚暈の上に捨て置かれ

三日はや過ぎて四日の日の光

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

人日の昭和遠しと思ふのみ

あれこれと暈に並べ冬隣

松過の大根抜きたる畑かな

賽の目の豆腐も入れて納豆汁

重ね着て齡めでたく重ねをり

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

靴べらで踵すべらせ初詣

かの人もわれの賀状を読むころか

通行の妨げとなる石鹼玉

賽の目の豆腐も入れて納豆汁

松過の大根抜きたる畑かな

山葵播る手に雷といふ字かな

木の葉髪紫に染め老いゆくも

重ね着て目出度く齡重ねをる

万力に万の力や雲の峰

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

広々と人で埋めて夏の海

靴べらで踵するりと初詣

黒揚羽大きな息を吐くならむ

かの人もわれの賀状を読むころか

昼寝覚暈の上に捨て置かれ

旧年や遮光ガラスの薄みどり

噴水に夕立の水も循環す

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

吟行に夕立たまはることもかな

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

土用波徒党を組んで来りけり

弟の悔し涙に取る歌留多

上空に雲の展開赤蜻蛉

極楽へ上る地獄の絵双六

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

三日はや過ぎて四日の日の光

貝割つて身のなき哀れ貝割菜

人日の昭和遠しと思ふのみ

通行の妨げとなる石鹼玉

木の葉髪紫に染め老いゆくも

初場所や密かに確と徳俵

山葵播る手に雷といふ字かな

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

着膨れて亀の如くに顔を上げ

万力に万の力や雲の峰

靴べらで踵すとんと初詣

昼寢覚暈の上に捨て置かれ

かの人もわれの賀状を読むころか

吐く息を人こそ知らね黒揚羽

旧年や遮光ガラスの薄みどり

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

噴水に夕立の水も循環す

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

土用波徒党を組んで来りけり

弟の悔し涙に取る歌留多

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

極楽へ上る地獄の絵双六

貝割つて身のなき哀れ貝割菜

三日はや過ぎて四日の日の光

タテの列ヨコの列夜の長きかな

人日の昭和遠しと思ふのみ

賽の目の豆腐も入れて納豆汁

松過の大根抜きたる畑かな



通行の妨げとなる石鹼玉

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

山葵播る手に雷といふ字かな

靴べらで踵ををさめ初詣

万力に万の力や雲の峰

かの人もわれの賀状を読むころか

昼寝覚暈の上に捨て置かれ

旧年や遮光ガラスの薄みどり

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

土用波徒党を組んで来りけり

弟の悔し涙に取る歌留多

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

極楽へ上る地獄の絵双六

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

三日はや過ぎて四日の日の光

タテの列ヨコの列夜の長きかな

人日の昭和遠しと思ふのみ

納豆汁豆腐も入れて豆尽し

松過の大根抜きたる畑かな

木の葉髪うす紫に染めてもや

着膨れて亀の如くに顔を上げ

通行の妨げとなる石鹼玉

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

松過の大根畑に風が吹く

山葵播る手に雷といふ字かな

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

この部屋を見廻してゐる水仙花

万力に万の力や雲の峰

かの人もわれの賀状を読むころか

モニターを切れば真つ黒福寿草

昼寢覚暈の上に捨て置かれ

靴べらも今年のちから初詣

着膨れて亀の如くに顔を上げ

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

乗り合はす人に幸あれ初電車

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

旧年や遮光ガラスの薄みどり

土用波徒党を組んで来りけり

手が逸れて、れてで止りし手毬唄

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

弟の悔し涙に取る歌留多

タテの列ヨコの列夜の長きかな

極楽へ上る地獄の絵双六

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

三日はや過ぎて四日の日の光

木の葉髪うす紫に染めてもや

人日の昭和遠しと思ふのみ

通行の妨げとなる石鹼玉

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

三日はや過ぎて四日の日の光

山葵播る手に雷といふ字かな

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

モニターを切れれば真つ黒福寿草

万力に万の力や雲の峰

かの人もわれの賀状を読むころか

人日の昭和遠しと思ふのみ

昼寝覚暈の上に捨て置かれ

回線の御慶画像にやや遅れ

松過の大根畑に風が吹く

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

靴べらも今年のちから初詣

この部屋を見廻してゐる水仙花

吟行にまさかの夕立合ッ点じや

乗り合はす皆に幸あれ初電車

着膨れて亀の如くに顔を上げ

土用波徒党を組んで来りけり

旧年や遮光ガラスの薄みどり

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

ペン先をカチと押し出す淑気かな

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

手がそれで、れてで止りし手毬唄

タテヨコに文字を埋めゆく夜の長き

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

弟の悔し涙に取る歌留多

木の葉髪うす紫に染めてもや

極楽へ上る地獄の絵双六

雛の間を締め出されたる男たち

飛ぶ鳥は翼を広げ初日の出

三日はや過ぎて四日の日の光

通行の妨げとなる石鯀玉

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

モニターを切れば真つ黒福寿草

大学の中のビル群初燕

元旦の氷の溶けし水たまり

人日の昭和遠しと思ふのみ

鰻井やふとウナ電といふ言葉

かの人もわれの賀状を読むころか

松過の大根畑に風が吹く

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

回線の御慶画像にやや遅れ

この部屋を見廻してゐる水仙花

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

乗り合はす皆に幸あれ初電車

着膨れて亀の如くに顔を上げ

土用波徒党を組んで来りけり

旧年や遮光ガラスの薄みどり

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

ペン先をカチと押し出す淑気かな

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

雪月花書初の字のいい匂ひ

タテヨコに文字を埋めゆく夜の長き

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

弟の悔し涙に取る歌留多

木の葉髪うす紫に染めてもや

極楽へ上る地獄の絵双六

通行の妨げとなる石鹼玉

木の葉髪うす紫に染めてもや

三日はや過ぎて四日の日の光

雛の間を締め出されたる父と兄

初日の出鴉も高く飛び上り

モニターを切れれば真つ黒福寿草

大学の中のビル群初燕

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

人日の昭和遠しと思ふのみ

昼寝覚醒の上に捨て置かれ

かの人もわれの賀状を読むころか

松過の大根畑に風が吹く

鰻井にふとウナ電といふ言葉

回線の御慶画像にやや遅れ

この部屋を見廻してゐる水仙花

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

乗り合はす皆に幸あれ初電車

着膨れて亀の如くに顔を上げ

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

旧年や遮光ガラスの薄みどり

土用波徒党を組んで来りけり

ペン先をカチと押し出す淑気かな

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

書初の雪月花のいい匂ひ

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

タテヨコに文字を嵌めゆく夜長かな

弟の悔し涙に取る歌留多

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

極楽へ上る地獄の絵双六

通行の妨げとなる石鹼玉

木の葉髪うす紫に染めてもや

三日はや過ぎて四日の日の光

雛の間を締め出されたる父と兄

地続きの地面の上の初日の出

モニターを切れれば真つ黒福寿草

大学の中のビル群初燕

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

人日の昭和遠しと思ふのみ

昼寝覚醒の上に捨て置かれ

かの人もわれの賀状を読むころか

松過の大根畑に風が吹く

鰻井にふとウナ電といふ言葉

回線の御慶画像にやや遅れ

この部屋を見廻してゐる水仙花

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

乗り合はす皆に幸あれ初電車

着膨れて亀の如くに顔を上げ

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

旧年や遮光ガラスの薄みどり

土用波徒党を組んで立ち上る

ペン先をカチと押し出す淑気かな

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

書初の雪月花のいい匂ひ

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

タテヨコに文字を嵌めゆく夜長かな

弟の悔し涙に取る歌留多

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

極楽へ上る地獄の絵双六

通行の妨げとなる石鹼玉

木の葉髪うす紫に染めてもや

三日はや過ぎて四日の日の光

雛の間を締め出されたる父と兄

地続きの地面の上の初日の出

モニターを切れれば真つ黒福寿草

大学の中のビル群初燕

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

人日の昭和遠しと思ふのみ

昼寝覚醒の上に捨て置かれ

かの人もわれの賀状を読むころか

松過の大根畑に風が吹く

鰻井にふとウナ電といふ言葉

回線の御慶画像にやや遅れ

この部屋を見廻してゐる水仙花

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

乗り合はす皆に幸あれ初電車

着膨れて亀の如くに顔を上げ

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

旧年や遮光ガラスの薄みどり

土用波肩組み合つて立ち上る

ペン先をカチと押し出す淑気かな

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

書初の雪月花のいい匂ひ

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

タテヨコに文字を嵌めゆく夜長かな

弟の悔し涙に取る歌留多

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

極楽へ上る地獄の絵双六

通行の妨げとなる石鹼玉

木の葉髪うす紫に染めてもや

三日はや過ぎて四日の日の光

雛の間を締め出されたる父と兄

地続きの地面に親し初日の出

モニターを切れれば真つ黒福寿草

大学の中のビル群初燕

まんまるなエンジンで飛ぶ初御空

人日の昭和遠しと思ふのみ

昼寝覚醒の上に捨て置かれ

かの人もわれの賀状を読むころか

松過の大根畑に風が吹く

鰻井にふとウナ電といふ言葉

回線の御慶画像にやや遅れ

この部屋を見廻してゐる水仙花

白も黄も蝶は小さし黒揚羽

乗り合はす皆に幸あれ初電車

着膨れて亀の如くに顔を上げ

吟行にまさかの夕立合ツ点じや

旧年や遮光ガラスの薄みどり

土用波肩組み合つて立ち上る

ペン先をカチと押し出す淑気かな

倫敦の霧の茶店の紫煙かな

書初の雪月花のいい匂ひ

貝割つて虚ろなりけり貝割菜

独逸ならカルテともいふ歌留多なり

タテヨコに文字を嵌めゆく夜長かな

弟の悔し涙に取る歌留多

納豆汁豆腐も入れて皆大豆

極楽へ上る地獄の絵双六